

福岡市科学館 第21回 サイエンスコミュニケーション開発会議		作成日:2024年6月18日(火)
月日: 2024年6月18日(火)	時間: 14:00~17:00	場所: 福岡市科学館 6階サイエンスホール

出席者:

【委員】

- 日本ボーイスカウト福岡県連盟 理事長 ■ 井手
- 九州大学 大学院 人間環境学研究院 准教授・博士(人間環境学) ■ 木下
- 福岡市立高木小学校 学校長 ■ 園田
- 科学コミュニケーター ■ 本田
- 株式会社トータルメディア開発研究所 西日本事業本部事業推進部 チームリーダー ■ 姉川
- 独立行政法人 国立科学博物館 産業技術史資料情報センター 参事役・博士(工学) □ 亀井
- 九州大学 大学院 芸術工学研究院 デザインストラテジー部門 教授 ■ 平井
- 福岡市科学館 館長 ■ 矢原
- 学校法人 産業医科大学 医学部医科物理学 准教授・博士(理学) ■ 吉田
- 株式会社西日本新聞社 こどもふれあい本部事務局 こどもタイムズ編集部編集長 兼 特別論説委員 ■ 久保田
- 大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 共創戦略統括本部 特任准教授・博士(医学) ■ 坂本
- 株式会社HUMIコンサルティング 代表取締役/コーディネータ ■ 中村
- 株式会社トータルメディア開発研究所 PPP事業本部部長 兼 九州事務所長 ■ 森岡
- 福岡テンジン大学 学長 ■ 岩永
- 公立大学法人福岡女子大学 教授・博士(工学、技術経営)・女性リーダーシップセンター副センター長 ■ 品川
- 国立情報学研究所 名誉教授・理学博士 ■ 高野
- 福岡市科学館 プロジェクトアドバイザー ■ 高安

【オブザーバー】

- 福岡市こども未来局 こども政策部こども健全育成課 ■ 鐘ヶ江

【特定事業者/指定管理者】

- 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 代表取締役 □ 牛村
- 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 取締役 ■ 佐藤

【事務局】

- 福岡市科学館 事業管理者 ■ 吉武 ■ 野上 ■ 上田 ■ 高山
- 福岡市科学館 職員 ■ 林 ■ 大石 ■ 板垣 ■ 坂部
- 藤瀬 ■ 川添 ■ 高瀬 ■ 西澤
- 土田 ■ 鈴木(司会) ■ 今奈良(記録)(敬称略)

※当会議は、福岡市科学館特定事業の事業者並びに指定管理者である株式会社福岡サイエンス&クリエイティブが設置し、運営する会議である。

配付資料:

- ・次第
- ・資料1 委員名簿
- ・資料2 前回議事録
- ・資料3 福岡市科学館運営状況報告
- ・資料4 サイエンスコミュニケーション開発会議運営方針
- ・資料5 分科会の運営方針
- ・資料6 サイエンスコミュニケーション開発会議体制図

■議事内容(概要)

●第1部

1. 委員のご紹介(資料1)

2. 議長・副議長の選任(資料1)

3. 2023年度のふりかえり(資料2)

発言

鈴木

鈴木

高安

#### 4. 福岡市科学館運営状況報告(資料3)

##### 【管理運営責任者 野上から説明】

野上

- ・年報は完成次第お送りする。
- ・2023年度の利用者数は、890,030人で達成率111.3%、前年度比144.9%となった。開館からの累計は5,006,305人。
- ・3月30日に累計500万人を、3月29日にはドームシアターの利用者数100万人を達成した。
- ・特別展では「ゴジラ展」「ヨシタケシンスケ展かもしれない」「ざんねんないきもの事典」「動画クリエイター展」を開催した。「ゴジラ展」では科学とアートに共通する「誰も見たことがない世界を追い続ける姿勢」の大切さ、素晴らしさを伝えた。「ヨシタケシンスケ展かもしれない」では、大変好評を博し、最終日には企画展示室の開館以来最多の4,349人/日を記録した。
- ・企画展では「福岡のすごい石展」「アイデアをカタチに」などを実施した。
- ・ドームシアター(プラネタリウム)は、コロナ対応から通常のスケジュールに戻し、16万5千人の利用者となった。スペシャルイベントは延べ82回実施し、1万人を超える方にご利用いただいた。
- ・教育普及事業として、来館者とコミュニケーションを取りながら基本展示室内でのサイエンスショーや、テーブルサイエンス、週末や長期休日に実施する科学実験プログラム、ものづくりプログラムやセミナー、フィールドワーク、サイエンスカフェなど、多様なプログラムを年間約5,400回実施した。
- ・福岡市立小学校の4年生を対象とした1日学習や、連続開催のクラブ活動、スーパーサイエンスジュニア講座、ジュニア科学者要請講座、SDGs家族会議、子ども社会参加各キッズクルー活動なども実施している。
- ・2022年度末:大規模展示更新「SCシアター」「みえないはたらきもの」を設置。
- ・2023年度:AIの仕組みを伝える展示、ロボットの構成要素を扱った展示、「福岡の自然発見 ジオラマサーチ」などを公開。

##### 【補足】

- ・「ヨシタケシンスケ展かもしれない」の売り上げが伸びた要因として特別展自体の人气が高かったことがあげられる。

#### 5. 2024年度サイエンスコミュニケーション開発会議の運営方針と分科会の方針(案)(資料4～5)

##### 【事業推進責任者 上田から説明】

上田

- ・昨年度はサイエンスショーからセミナー講座、アウトリーチ出前授業、市民参画事業まで合わせて6,266回行っている。
- ・ジュニア科学者養成講座、キッズクルーなどではサイエンスコミュニケーターが子どもたちに深く関わり、自己肯定感を高め、目標達成を促している。
- ・当館の運営基本理念は「人が育ち、未来をデザインしていく科学館」、事業コンセプトは「サイエンス&クリエイティブ」となっている。サイエンスコミュニケーターは子どもの好奇心や疑問を引き出し、想像を膨らませ創造する力を育てることを目的としている。
- ・科学館の活動において6つの視点が求められる。
  1. 科学館のミッションや運営方針に対応するプログラム
  2. 調査研究・収集資料を活用したプログラム
  3. 市民科学に関連する展示・学習プログラム
  4. 領域複合的な学習プログラム(STEAM教育を含む)
  5. 現代的な課題への対応に関連する学習プログラム
  6. インクルーシブな博物館に関連する学習プログラム(ジュニア科学者養成講座)
- ・ダーウィンコース:生命人間・環境科学 ニュートンコース:物理・化学・情報 定員15名 期間は半年 10～12回
- ・学校教育とは異なり経験値を増やすことで、意味記憶だけでなくストーリー記憶に重点を置く。
- ・本講座は探求ゼミとセットとなっており、終了後に参加者全員に個別のブックレットを配布している。(SDGs家族会議)
- ・小学校4年生以上 期間:半年間 内容:フィールドワーク・ワークショップ・発表会等
- ・家族で福岡の未来を考え行動につなげる。2023年は17の課題を理解することや体験性を重視した連続講座 高校生のための市民講座「創造する未来と科学の可能性」
- ・社会課題を解決するためには様々な分野、横断的なつながりが必要であり、科学の学びの連鎖を模擬体験することで、科学のつながり方を意識させる。たくさんの講座やワークショップ、イベントが展開されているが、全てコンセプトである、「サイエンス&クリエイティブ」を念頭に置き、企画されている。

##### <第一分科会> 一多様な学習プログラムの展開一

林

- ・昨年度は、体系表の横軸を年齢で区切るのではなく、5つの「育ち」に分類した。今年度はこの体系表の縦軸の項目を検討し、独自の体系表を完成させ、既存のプログラムがどの項目に当てはまるかを分類する。
- ・体系表は「来館者」が主語となっているため、プログラム開発者や実施者がどのように組み立て、演じれば目標とする「育ち」につながるかを検討する。

##### <第二分科会> 一大規模展示更新に向けた展示計画一

板垣

- ・2026年度に実施する大規模展示更新としてふさわしい「次世代の展示」の方向性を検討し、内容を具体化する。
- ・昨年度「展示の位置づけ」「方向性」が協議され、提言に盛り込まれた。その協議を継承し、「社会的課題(問題としてではなく、よりよい未来を考える)」と「ひと(人間を中心に据え、自分自身を知る)」をテーマに大規模展示更新としてふさわしい次世代の展示の方向性を検討し具体化する。
- ・これまで展開してきた方向性を維持しながら、昨年度までの提言を軸にテーマ(ひと)を深める必要がある。それを体現するための手法を議論し、その展示例を具体化する。また、活きる展示物をつくるためには、運営スタッフと認識を合わせておくことも課題である。

##### <第三分科会> 一独自性のある情報発信のあり方一

川添

- ・科学情報に関する考え方をより明確にしつつ、異文化の各機関との連携や、地域連携による独自性のある情報や利用者や幅広い市民の協力を活かしたコンテンツを創り出すしくみ、当館らしい提供の仕組みや活動等について検討する。
- ・自発的学びを提供できる科学館にむけて、昨年度の5つの提言「①地域科学館として情報編集スキルや発信スキルの向上 ②科学館内アクティビティのアーカイブとコンテンツ化 ③異分野との積極的な連携、科学館の利用者層の広がり ④ナビゲーター/ファシリテーターとしての機能強化 ⑤科学館利用者の体験を蓄積できる仕掛けづくりを目指す。」を踏まえて協議し、2025年度に実務展開ができる方針を検討する。
- ・ナビシステムの方針や自然科学研究機構とのシンポジウムの方針を中心に協議する。

##### <第四分科会> 一次世代型地域科学館の機能一

西澤

- ・最終5ヶ年計画の目標である「イノベーションの実施」に向けて、「次世代型地域科学館」のあるべき姿に近づくために必要な「科学館機能」を検討する。
- ・前年度に提案された、「総合知」を目指す際に実現すべき機能を踏まえ、変動する社会に対応するテーマをスタッフが自発的に提案し、展示やアクティビティに昇華できる仕組み、イノベーションを起こすための方法と科学館に必要な昨日などについて討議し、提言として整理する。
- ・次の本会議に向けて、科学館の実績を6つの視点で紹介し、委員の先生方に分析をしていただく。
- ・今年度の課題としてインナーブランディングの継続、科学館ブランドの明言化、新しい取り組みに挑戦する、アウトナーブランディング、世界に向けた発信、人類史など人を軸に展開、「新しいテーマをスタッフや人々が提案しチャレンジできる」仕組みづくり、連携ネットワークの整理などがあげられる。

##### 補足

高安

- ・通常、外部委員による協議会は、事務局などからテーマが与えられることが多いが、科学館運営の現場からのテーマ提案に基づき、4つの分科会という形になっている。
- ・これらのテーマが、分科会間で重なって議論をすることもある。事務局と調整しながら現在の設定になっている。

<休憩> 15分

●第2部

6. 協議:各分科会について 70分

7. 報告:協議の内容について

<第一分科会> 一多様な学習プログラム体系一

- ・多様な学習体系プログラムを作るために必要な要素を洗い出した。
- ・昨年度の話合いでは「人の育ち」に注目し、育ちの5分類に対して一つ一つのコンテンツがどの分類に当てはまるかを考えた。これらの5分類がどう割合で作られているのか、どう割合で参加する人が見ればいいのかという部分に関しては分かりやすいが、それだけでは多様なプログラムをバランスよく、様々な方に提供できているのかというところまでは分からないので、全体を俯瞰するチェックができないかと議論した。
- ・宇宙や環境、生命、未来などといった、展示室だけではなく他の物を扱うに当たっても、当てはまる分類がどのような育ちに働きかけるものなのかを知ることで、様々なバランスを見る際に利用でき、館側がチャレンジする指標になるのではないかと考えた。実践後、失敗や引っかかる箇所等あれば微調整を行い、できることを少しずつ探っていきたい。

本田

<第二分科会> 一大規模展示更新に向けた展示計画一

- ・ヒトについて深掘りしたいという意見の元、議論を行った。ヒトには周りを取り巻く4つの分野があり、それらは分断して見えるが、それをつなげるのがヒトである。
- ・それぞれの分野の内容を繋げていく際に、自分が主役になって様々なものをつなげていくストーリーを組むことができれば、非常に楽しいものになるのではないかと。展示としてヒトというものを伝えるのではなく、様々な人から色々な意見をもらい、選択しながら、最終的に色々な不思議や楽しさを感じるものが人間であるということを感じてもらいたい。
- ・次に何に向けて、最初に何が必要なのか、最後に何が必要なのか、あるいは最初と最後のつながるところに何が必要なのか、起点と中点と終点に必要なものはなにがあるのかを考えていきたい。
- ・具体的なアイデアとしては、展示室等を体験した後ストーリーブックのようなものを作成し、館に来るたびに歴史が増えていくようなものや、ストーリーを自分で組み立てて、それを実行していくもの、性格診断のようなものを行い、自分がなにものなのかを知ることのできるアプリを作成することなどが挙げられた。

姉川

<第三分科会> 一独自性のある情報発信のあり方一

- ・昨年の提言のうち、特に「異分野との積極的な連携、科学館の利用者層の広がりを目指す」を受けて、具体的にどうすることができるかを中心に議論した。
- ・現状、科学館は子どもたちをメインの利用者層としているが、子育てをしている大人たちを含めて利用者層を広げていきたい。
- ・量子科学や遺伝子の話、温泉の効能、朝顔の研究、性差、地球外生命体の話など、幅広いテーマで、具体的なアイデアを共有した。
- ・9月の分科会にむけて、科学館スタッフが取り上げたいテーマのアイデア出しや、各委員が現在の社会に対して目を向けるべきテーマが何かという視点で、それぞれの立場から具体的なアイデア出しを行いたい。

中村

<第四分科会> 一次世代型地域科学館の機能一

- ・今現在事業の全体を俯瞰するマップがないので事業全体のマップを作成すべきだ。
- ・中高生の利用が少ないのは、中高生の深掘された知識に対応する事業がない。中高生向けには個別に知識を与えるプログラムを作成したいが、莫大な人員が必要になるため、現状実現できていない。中高生向けのプログラムを作成するための工夫が必要。
- ・天井知らずの情報提供、デザイン思考、この2つに配慮した次世代型のプログラムを作ることを考える必要がある。一つの分野を6つの視点から見ること、館のミッションに即しているか、指導調査研究の根に基づいたプログラムなのか、その中で次世代とはなにか、市民参画への協力プログラムとはなにか、多くの議論を重ね、探し出す必要がある。
- ・ダーウィンコースなどのとても良いプログラムがあるのでデジタル化を行い、落選してしまった子どもたちもオンラインで受講できるようにするなどの対策を取るべき。年齢などにより、今回は応募できない可能性もあるので、デジタル化を通して世代間格差を埋め、世界へ情報発信するということが必要なのではないか。
- ・様々な意見の間をいったりきたりして発見した中からいいものを導き出すことが重要である。

高安

品川

8. 質疑応答

- ・第一分科会では4つの展示の基本的な区分について、尊重した方がいいという結論にまとまったが、情報提供を行う立場からしても同じ結論ということで理解しているのか。  
→4つの分野にとらわれず、サイエンスコミュニケーターが日常的にお客様と触れ合っていく中で、具体的なテーマを見つけていくべきだと思う。
- ・当館は地域の科学館として設立されているが、地域の幅をもう少し広げてもいいのではないかと。  
→九州内でもこのような規模の科学館は少ないので、マーケットをもっと広くしてもいいと思う。例えば鹿児島県の学校の修学旅行先とするなど、ターゲットを九州という幅に広げてみていいのではないだろうか。
- ・地域の科学館と設定されているが、地域という幅を広くとり、普遍的なものを多く取り扱ってもいいのではないだろうか。
- ・最近のデザイン思考は、「利用者のニーズに答えればいいのか」という浅はかなものとなっているが、実際はコミュニケーションをデザインする、計画をデザインするなど幅広い意味でデザインを追求していく必要があるという指摘があった。
- ・第三分科会の話の中で他の公共機関との連携を深めていくというあったが、これにより、福岡市科学館を通して様々な人々の集まる機会が増えるのではないだろうか。
- ・様々な分野の先生方が参加されているので、分科会という垣根を越えて、進めていくべきだと思う。科学館は、子どもだけでなく大人も含め、全ての人間にとって学びの場である。ファシリテーターが、自分の興味がある分野を起点にしてどのように伝えていくのかということも科学館で一丸となって決めていくことができれば一番よいと思う。
- ・分科会の垣根を越えた会議のあり方を検討してほしい。

高安

中村

高安

久保田

高安

ナポーター

坂本

高安

9. 次回開催の連絡

- ・次回は2025年1月に実施予定。10月ごろに日程連絡予定。

鈴木